

金沢市パートナーシップ宣誓制度

金沢市では、「人権教育・啓発行動計画」に基づき、市民一人ひとりがお互いの人権を尊重し合う社会の実現を目標に計画の推進に取り組んでいます。併せて、金沢SDGs行動計画の目標の一つ「LGBTフレンドリーなまちにする」の具現化に向け、令和3年7月からパートナーシップ宣誓制度を開始しました。

性の多様性について理解が進み、一人ひとりの人権が尊重され、誰もが自分らしく安心して過ごせる社会を目指しています。

概要

1 金沢市パートナーシップ宣誓制度とは

性的マイノリティの方や事実婚の方など、同性・異性問わず、お互いを人生のパートナーとし、日常生活において、責任を持って相互に協力し合うことを約束したお二人の関係について、宣誓に基づき、本市がパートナーシップ宣誓書受領証等を交付するものです。

2 宣誓できる方（以下の要件をすべて満たす必要があります。）

- ◆ 双方が成人であること。
- ◆ 双方もしくは一方が市内に住所を有していること。
- ◆ 現に婚姻していないこと。
- ◆ 宣誓しようとする方以外とパートナー関係がないこと。
- ◆ 宣誓しようとする方同士が近親者でないこと。

3 宣誓に必要な書類

- ◆ 住民票の写し
- ◆ 婚姻をしていないことが確認できる書類（戸籍個人事項証明書など）
- ◆ 本人確認書類（マイナンバーカード、運転免許証など）
- ◆ 通称名の使用を証明する書類（※通称名の使用を希望する場合のみ）

宣誓には、事前の必要書類の提出と予約が必要です。
詳細は、金沢市公式ホームページに掲載の「金沢市パートナーシップ宣誓制度ご利用の手引き」をご確認ください。



「金沢市パートナーシップ宣誓制度ご利用の手引き」
https://www4.city.kanazawa.lg.jp/22075/jinken/life_partnership.html

市民・事業者の皆様へ

本制度の対象となる方々は、人生のパートナーであるにも関わらず「（婚姻による）家族なら利用できた福利厚生やサービスを受けることができない」「パートナーに万が一のことがあっても親族として扱われない」など生活する上でさまざまな困難に直面しています。また、二人の関係を対外的に証明することができない生きづらさがあります。

この制度は、法的な効力（婚姻や相続、税金の控除等）を生じさせるものではありませんが、悩みや生きづらさを少しでも軽減し、お二人の自分らしい生き方に寄り添い、金沢市として応援するものです。

制度の趣旨をご理解いただき、本制度を活用できる場面が増えますようご協力をお願いいたします。

金沢市市民局 ダイバーシティ人権政策課

所在地：〒920-8577 金沢市広坂1丁目1番1号

電話：076-220-2095 [午前9時～午後5時45分（土・日・祝・年末年始を除く）]

Eメール：jinken@city.kanazawa.lg.jp

発行 令和3年10月



金沢市人権問題講演会・
パートナーシップ宣誓制度導入記念シンポジウム

カラフルなまち あなたも私もLGBTフレンドリー！

本市では、平成25（2013）年に「金沢市人権教育・啓発行動計画」を策定し、「すべての市民が日常生活の中で人権を意識し、多様な人々がお互いの違いを認め合い、お互いの人権を尊重し合う社会の実現」を目標に、計画の推進に取り組んでいます。

令和2（2020）年7月には内閣府のSDGs未来都市に選定され、その行動計画である「金沢ミライシナリオ」において、「LGBTフレンドリーなまち」の実現に取り組むこととし、その具現化に向けて、令和3年7月、金沢市パートナーシップ宣誓制度を導入しました。

この制度は、法的な効力を生じさせるものではありませんが、性的マイノリティの方をはじめとした、様々な事情によって婚姻の届出をせず、あるいはできず、悩みや生きづらさを抱えている市民の方々の気持ちを尊重し、人生のパートナーと協力しながら自分らしく、いきいきと生活されることを金沢市が応援するものです。

今年度の人権問題講演会はLGBTをテーマとし、パートナーシップ宣誓制度の導入を記念したシンポジウムと併せて開催する予定でありましたが、今般の新型コロナウイルスの感染拡大を受け、従来の対面形式から今回の誌上形

式に変更し開催することといたしました。

NPO法人グッド・エイジング・エールズ代表の松中権氏にご講演いただき、また、松中氏、YouTuberのかずえちゃん、県立高校副校長の斎藤みどり氏、LGBTアクティビストの東小雪氏にて、金沢がLGBTフレンドリーなまちになる、というテーマでのディスカッションをしていただきました。

今回の講演会等の模様をご覧くださいことにより、性的マイノリティの方々に対する理解が広がり、多様性を認め合い、お互いの人権を尊重し合う社会の実現の一助となることを願いまして、私からの挨拶といたします。



金沢市長 山野 之義

基調講演「知っておこう！LGBTの“いま”」

講師：松中 権

(一般社団法人金沢レインボープライド共同代表／NPO法人グッド・エイジング・エールズ代表)



LGBTとは、性的マイノリティの総称のひとつ。様々な調査で人口の5～10%程度という結果があり、みなさんと一緒に学び、働き、暮らす存在なのですが、多くの当事者は差別や偏見を恐れてカミングアウト（自身のことを明かすこと）をしていないため、その姿は見えずらく身近に感じられていません。どんなことに悩み、どんな困難があるかも見えづらい状況です。金沢出身で当事者のひとりでもある私自身の人生の話を通して、みなさんの隣のLGBTについて想像し、理解するきっかけにしたいだけだと思います。

●金沢で過ごした思春期

1976年、男3兄弟の次男として金沢市で生まれました。保育園の頃は、男子といえると楽しいなと感じてはいたものの、この年齢ですので、「好き」という感情はまだわかりません。それが小学校に上がると、男子は女子を、女子は男子を対象に、クラスの中で「誰が好き？」といった会話が始まります。その時になって、自分の「好き」はみんなと違って、どうも「男の子」みたいだぞ、そう気付いたんです。でも、ふと疑問が浮かびます。「男の子が好き」ということは、僕は女の子として生まれるはずのところを、間違って男の子に生まれてしまったのでは？小学生の頃は、そんな疑問と不安を抱えていました。

中学生になると、あるお笑いTV番組に登場した、「保毛尾田保毛男」という「ホモ＝男性同性愛者」を揶揄するキャラクターが人気になります。「男性の姿をしていて男性が好き」という人を初めて見て、「自分と同じ人がいる」と、ある意味、胸を撫で下ろしました。でも、このキャラクターの影響で、クラスの中で「ホモ、ホモ」といじめられる男の子も出てきました。どうして「ホモ」は、いじめられるのだろう。誰もいない図書館で、広辞苑などで調べてみると、そこには、ホモ、ホモセクシュアル、同性愛者、異常性愛、性倒錯などの文字が並んでいました。特に「異常」という2文字にショックを受けた僕は、「男性が好きなこと」は誰にも言えない、そう理解しました。保守的な地元においても自分と同じ人には出会えないと考え、とにかく金沢を出ていきたいと、大学進学を機に東京へ行くことにしました。ちなみに、ホモ、レズなどの呼称は現在侮蔑的だとされていますので、使わないようにしましょう。

●大学進学で東京へ、留学でメルボルンへ

東京の大学に進学した僕は、フィールドホッケー部という体育会系の部活に入りました。毎日のようにチームメイトと練習に打ち込み、充実した大学生活でした。でも、その一方で、自分がゲイであることがばれてしまうと、この居場所を失ってしまうのではないか、という不安を常に抱え、自身のセクシュアリティについてチームメイトに語ることはできません

でした。逆に、「ホモ」をネタにした冗談が飛び交うと自分も一緒になって笑っていました。でも、そうしたとき、いつも自分のことを笑われているように感じ、それも笑っているのは一番信頼しているチームメイトで……。そんな状況が、自分の中でだんだん受け止められなくなり、このままでは自分の人生ではなくなる、そう思うようになりました。

そんな折、大学の5年～6年目にかけて、オーストラリアのメルボルンに留学する機会を得ます。当時、オーストラリアは多民族主義、多文化主義を掲げ、多様性を大切にすることを旗印にしていました。また、ちょうどインターネットでゲイやレズビアンのカップルがシドニーやメルボルンで仲良く暮らしているというニュースを見たこともあって、ここだったら自分の人生を生きられるんじゃないか、そう思ったんです。そうして留学し、オーストラリアで最初にしたのは、カミングアウトでした。「I am gay.」というその一言を、新しくできた友人たちに伝える行為は、心臓が飛び出すほどの緊張の瞬間でした。でも、それに対して、まずは「I see.」、その後すかさず「Any boyfriend？(ちなみに、彼氏は?)」という返事がくる。これまで「彼女は？」という質問は何万回もされ、何万回もごまかしてきたけれど、日常会話の中で自然に「彼氏は？」と聞かれたことが本当に嬉しくて、モノクロの世界がカラーに戻っていくような感覚でした。

●電通への就職、NPO法人の設立

日本かオーストラリアか、どちらで働くかすごく悩みましたが、最終的に日本を選び、2001年4月、電通に入社しました。電通では16年間、勤務しました。そのちょうど中頃に、ゲイであることを社内で公表する選択をし、2010年に、多様な人たちが自分らしく過ごせる場づくりをする「グッド・エイジング・エールズ」というNPO法人を設立しました。社内でカミングアウトしたことで、ゲイであることを隠さなくて済み、本当に仕事楽しくやりやすくなり、おそらくパフォーマンスも上がっていたと思います。

2015年夏、母校の一橋大学でアウトティング事件が起こり、

一人のゲイの学生が命を落としました(アウトティング：同意なしにその人の性の在り方を第三者に暴露すること)。この事件をきっかけに、二足の草鞋を履いて、電通で働きながらLGBTのNPO活動をしていることが、どこか「逃げ」のように感じて、2017年6月末に電通を退社し、LGBTの活動に専念することにしました。その後はNPO法人グッド・エイジング・エールズをはじめ、プライドハウス東京、同性婚法制化のための「Marriage For All Japan」、金沢でのプライドパレード開催等を行う「金沢レインボープライド」など、さまざまな活動を行っています。

●日本のLGBTの現状と課題

日本のLGBTをとりまく課題の主なものとして、以下の3つの法制度が挙げられます。「同性婚の法制化」「LGBT差別禁止法の制定」「性同一性障害の手術等要件の撤廃」です。

世界では現在、アメリカや台湾をはじめ約30の国と地域で同性婚が可能です。しかし、日本ではまだ実現に至っておらず、G7(先進7カ国首脳会議)で同性カップルに法的保障がないのは日本だけです。2015年11月に渋谷区と世田谷区で始まった「地方自治体によるパートナーシップ制度」(法的拘束力はない)は、現在(2021年7月1日時点)、110の自治体で実施され、人口カバー率は37.8%、交付件数は2,018組(同年6月30日時点)となっています(渋谷区・虹色ダイバーシティ全国パートナーシップ制度共同調査)。また、2019年2月14日に、同性婚を求める「結婚の自由をすべての人に」訴訟が始まりましたが、最高裁判所の判断を仰ぐまでにはまだまだ時間を要します(2021年3月に札幌地裁が違憲判決)。原告の中には無念にも亡くなられた方もいます。立法府である国会での一刻も早い法制化が必要です。

現在、世界の80カ国以上でLGBTに対する差別を禁止する法律が整備されていますが、日本は未整備で、OECD(経済協力開発機構)による「LGBT法整備状況」のランキングでは、日本は35カ国中34位です。

2004年7月に「性同一性障害特例法」が施行され、戸籍の性別が変更可能になりましたが、断種手術をはじめ、その要件は人権を侵害し、国際人権義務に反するものです。速やかな要件撤廃が必要です。

●今日からできること

ウェルカミングアウト
アライになろう！

welcoming out!

国の法整備を後押しするものとして、様々な企業や団体がLGBTに対する取り組みをはじめています。2017年には経団連が提言を出したこともあり、その動きは大企業だけでなく、中小企業や地方の企業にも少しずつ広がりはじめています。具体的な取り組みについては、私の団体にて「PRIDE指標」というものを2016年から推進しているので、ぜひ、WEBサイトをチェックしてみてください。

制度とともに大切なのが風土です。2020年の電通ダイバーシティラボによる調査では、LGBT当事者の約7割が「周囲の人にカミングアウトしやすい環境になっていない」と答えています。

風土や環境を安心・安全なものにしていくために、最後に「今日からできること」をお伝えします。それは「ウェルカミングアウト～アライになろう！～」です。LGBT当事者にとってカミングアウトはなかなか難しいものです。でも、カミングアウトしないと「いないこと」にされ、環境は何も変わりません。それを変えるために、当事者ではない方にもできること、それが「ウェルカミングアウト」です。LGBTを「ウェルカム」であることを、カミングアウトするのです。自分たちはLGBTフレンドリーだよ、味方だよ、一緒にこの社会を変えていこうよ、と表明してください。アクションしてください。ぜひ、想像力を働かせて「アライ(*)」になってください。

*アライ(ally):LGBTの味方・仲間として、社会を変えていくために、共に行動してくれる人。

■4つの「性」

- ①身体的性(Sex)
解剖学的な性。出生時に割り当てられた性別
- ②性自認(Gender Identity)
自身の性をどのように認識しているか
- ③性的指向(Sexual Orientation)
好きになる相手の性
- ④性表現(Gender Expression)
自身の性をどう表現したいか(服装・言葉遣い等)

■「LGBT」とは？

Lesbian(レズビアン)：
女性として女性を愛する人＝女性同性愛者
Gay(ゲイ)：
男性として男性を愛する人＝男性同性愛者
Bisexual(バイセクシュアル)：
男性も女性も愛する人＝両性愛者
Transgender(トランスジェンダー)：
性自認と身体的性に不一致・違和がある人

※医師が診断する精神疾患名の「性同一性障害」とは異なる概念

※本誌では「LGBT」を使用していますが、現在では、より包括的な表現として「LGBTQ」「LGBTQ+」も使われるようになっていきます。
※Qは「クエスチョニング(Questioning)」と「クィア(Queer)」を意味します。
●クエスチョニング：自らの性の在り方を探していたり特定しない人。
●クィア：性的マイノリティを包括する言葉。もともと「風変わりな、奇妙な」という意味で、同性愛者への侮蔑語だったネガティブな言葉を逆手に取り、ポジティブに展開して使用。
●+(プラス)：性は多様で、LGBTQ以外にもさまざまな性の在り方があり、包括的な意味を持たせるために付けられる。



北陸は他の地域に比べて、 性的マイノリティへの嫌悪感が強い？

かずえちゃん：ある調査^(※)によると、北陸は他の地域に比べて、性的マイノリティへの嫌悪感を抱く人の割合が高かったそうです。この調査結果について、どう感じますか？

松中：北陸の特徴として、他人と違うことを極端に避けるというか、ちょっと浮いた人を除け者にするというか、そういう経験を子どもの頃にすごくしていたので、「そうだろうな」というのが第一印象です。

斎藤：私も納得の結果です。北陸って地域愛がすごくあって、家族愛もとても強い。それが良いほうにいくといいのですが、「他所様に恥ずかしい」といった会話が日常的にあるように、規範から外れている人が身内にいると、「それは困る」という反応になります。そういう雰囲気を経験を子どもの頃からひしひしと感じ

て育つので、カミングアウトも非常にしづらい。そうなると誰もカミングアウトしないので、周りにそういう人はいないことにされてしまうという悪循環もあると思います。

東：率直に、すごく残念です。それでも、金沢市にパートナーシップ宣誓制度ができたことで、確実にこの状況は変わっていくだろうと希望を持っています。ここで注意してほしいのは、本日登壇している私たちはカミングアウトして生活していますし、私はカミングアウトして良かったと思っていますが、それはそういう環境や事情、タイミングがあつてのことで、特に地方では人の距離感も近いですし、絶対に無理はしないでください。

斎藤：私はかなり前に身近な人にだけカミングアウトをしたのですが、そのときにみなさんが異口同音に「自分には言ってもいいけど、他の人に言ってはダメだよ」とアドバイスしてくれたんです。だから、他の人に言ったら自分はおしまいかもしれない、と本気で思っていました。でも、3年前に隠すことに耐えられ

なくなって広く公言してみると、別に何も起こりませんでした。教職を逐^おわれるかもという恐怖もありましたが、言ってみると案外これが大丈夫で、逆にすごくいい影響を生徒たちに与えたところもありました。教員はある程度、自己開示しないと生徒と人間関係を築けないところがあつて、そういう部分でも、カミングアウトしてよかったと思っています。

かずえちゃん：これまでの経験で、LGBTフレンドリーだなと感じたエピソードはありますか？

東：中学・高校はミッション系で、その学校の図書館に『同性愛の基礎知識』という本が収蔵されていて、借りることはできなかったのですが、隠れて読んでいました。他にもジェンダーやフェミニズム関連の本も並んでいました。司書の先生は「本屋さんの本は商品として買うものだけけれど、図書館に置いてある本は、みんなが考えるための本なんだよ」と教えてくれました。同性愛やジェンダーに関する本が図書館にあったことは、今思えば、自分の一生の中ですごく大切な出来事で、「存在しているんだよ」というポジティブなメッセージだったと思っています。また、文化祭では、同性愛に関する展示を企画したり、HIV陽性者の講演会を開いてくださったり、学校がLGBTフレンドリーで、それが今の私の基盤になっていると思います。

松中：僕がまだLGBTの活動を始める前の、仕事関係のある食事会でのこと。その中で僕がゲイだと知っていたのは1人で、他のメンバーは誰も知りませんでした。30代半ばで、案の定、彼女や結婚の話題になって、そのときに、その1人の方が、僕の浮かない表情を見つけて、「ところでさ」と言って話題をパッと変えてくれたんです。すごくホッとしたし、嬉しかった。LGBTフレンドリーというと、なんだか大変なことのよう聞こえるかもしれませんが、こうしたちょっとしたアクションや気遣いで、隣にいる誰かを救ってあげることができるんだなと思いました。

制服・服装で考える性表現

かずえちゃん：最近は学校の制服のデザインも選べるようになってきましたが、制服について、どう思いますか？ 必要だと思いませんか？

斎藤：石川県でも、一昨年くらいから制服を選択できる学校が増えてきました。ただし、その選択肢というのは、女子生徒が、スカートかスラックスを選べるというものです。私のようなトランスジェンダーじゃなくても、そもそも、北陸の冬は寒さが厳しいですから、スカートは嫌がられます。自転車も漕ぎにくいですし、スラックスを選べるようになったのは、女子にとってはよかったのではないかと思います。一方、男子がスカートを選ぶ権利はどうするのか。一部ではそういう話も出てきていますが、男子がスカートを履いた場合に、それが即カミングアウトに近いものになる可能性もあり、統一見解がないのが現状です。

東：事情は聞かずに、男子もスカートを履きたければ履けばいいのに、と私はすごく思います。例えば、タイプA B C Dとか、1 2 3 4とか、女子用、男子用とはしないで、もっとフラットな選択肢が何種類かあつて、その中から好きなものを選ぶようにすればいいのではないのでしょうか。でも、そうはいつでも、なんでスカートを履いているの、どうしてスラックスを履いているのと聞かれたときに、すごく傷つく生徒がいた場合に、どういったケアや配慮ができるのか。それを問われているのは、大人の側ではないかと思います。

斎藤：制服問題は今、高校生にすごく興味関心の高いテーマで、制服で高校の人氣が左右されるくらい影響力が大きいんです。SDGs(持続可能な開発目標)の観点で、自分たちの制服を考えるような研究をしている高校生も出てきています。理想は、自分たちの制服なんだから、生徒が自分たちで考えて提案し、一番良いと思うものを生み出してくれること。先生が主導権を握ると、どうしても大人の事情がいろいろ絡んできて、本質が



コーディネーター

かずえちゃん
YouTuber

福井県生まれ。民間企業勤務を経て、カナダに留学。帰国後、YouTubeでLGBTに関する情報発信をスタート。講演や執筆活動、コミュニティ交流などにも力を注ぐ。2021年からFM福井のSDGsアンバサダーを務める。



パネリスト

松中 権(まつなか ごん)
一般社団法人金沢レインボープライド共同代表／
NPO法人グッド・エイジング・エールズ代表／ブ
ライドハウス東京代表／一般社団法人Marriage
for All Japan 結婚の自由をすべての人に理事

金沢市生まれ。入社した働電通での経験をもとに、NPO法人を仲間たちと設立。退社後は、NPO専任代表となり、LGBTと社会をつなぐ場づくりを中心とした活動に加え、「プライドハウス東京」等にも取り組む。



パネリスト

斎藤 みどり(さいとう みどり)
県立高校副校長

金沢市生まれ。専門科目は世界史と倫理。現在、9つめの勤務校で副校長。1998年に私的にカミングアウト。2018年に公的にカミングアウト。理想は、カミングアウトしなくても誰もが当たり前生きていける社会。



パネリスト

東 小雪(ひがし こゆき)
公認心理師／LGBTアクティビスト／元タカラ
ジェンヌ

金沢市生まれ。日本初のパートナーシップ証明書を取得(2017年に解消)。LGBT・女性の生き方・自殺対策について講演、研修、TV出演、YouTube配信など幅広く活動中。『同性婚のリアル』等の著書がある。



金沢市人権問題講演会・パートナーシップ宣誓制度導入記念シンポジウムのパネルディスカッションの様様。左上から時計回りに、松中権さん、斎藤みどりさん、東小雪さん、かずえちゃん。

らはずれていくような気もするので、高校生が自分たちで考えてくれるのが一番嬉しいです。

松中：大賛同です。一緒に考えるプロセスが大事で、なんで制服を考えなければいけないのか、生徒たちも一緒に考えることで、自分たちの仲間の中にも悩んでいる人がいるかもしれないと気付いたり、じゃあ、こういうときはこうしようとか、何かあったときのアクションと一緒にその場で相談できたりとか、生徒さんが不在というのは、なんだかもったいないと思います。

かずえちゃん：斎藤さんは学生時代、女子の制服を着ていて、しんどかったですか？

斎藤：小学校に入ったときから制服があつて、あなたはこっちを着ないといけなですよ、と有無も言わせず流されていくので、途中からはあきらめモードでした。もっと違和感の強い人は制服が嫌で不登校になり、あるいは高校に進学しない選択をする人もいます。制服って本当に難しいと思うのですが、私の場合、女子の制服を着ていましたが、女子の制服を着てさえいれば、とりあえず斎藤は女子なんだということで、セクシュアリティについてとやかく言われなくて済むんです。その分、日常生活でのストレスが減る、という一面もある。もし制服がなかったら、自分は何を着ていったかなと、今でも考えることがあるのですが、ただ、社会に出る瞬間には、自分の服装を自分で決めないといけない。だから、遅かれ早かれ、自分はそのこと折り合いをつけないといけないというのはもちろんありますが、制服問題はなかなか一筋縄ではいかないと感じています。

東：斎藤さんは今、冠婚葬祭のときの服装は、どうされているんですか？

斎藤：今はカミングアウトしていますので、白か黒のネクタイに黒のスーツです。中途半端にカミングアウトをしていたときは、冠婚葬祭どころか日常的に学校へ着ていく服装に困っていました。「女性」として働いていたときは女性の服装でしたが、あるとき、そういう嘘をついて人生を台無しにするのは真っ平だと思って、明日からスカート履かない、と決めたんです。ですが、いきなり男性用スーツだとおそろく問題になるだろうと感じて、下はズボン、上はワイシャツでネクタイはしない、という中途半端な服装を選びました。けれど、昔のワイシャツはネクタイをしないと形にならなくて、どうしようかなと悩んでいたところに、私のパートナーがベストを作ってくれるようになったんです。そうするとそれが私のトレードマークのようになって、ベストを着ていると斎藤だな、みたいな感じで生徒も認知してくれるようになりました。だからベストは25着くらい持っています。何事も粘って続けていると、次の道が見えてくるものです。そして今思っているのは、どうして男性はネクタイをしないといけないのか。本当に自分はネクタイをしたいのかという、次の段階での疑問です。

かずえちゃん：京都に本社のある会社に非常勤嘱託として働くことになり、2021年4月に入社式がありました。服装は自由で、何を着ていこうかと考えたときに、制服の自由化について考えていたこともあって、一度、スカートを履いてみようと思ったんです。そして、その背景には、これまで取材で感じてきたこともありました。僕はYouTuberとして、たくさんのLGBT当事者の方にお会いし、インタビュー動画を撮影し公開しています。その撮影の際に、あるいは打ち合わせで入った喫茶店などで、トランス女性と一緒に場合に、周りからの視線が明らかに違うことがわかったんです。こんな目で毎日見られたら、たまったもんじゃないなと思いました。だから、めちゃくちゃ怖かったけ

れど、一度、スカートを履いて、その視線に晒されてみようと思ったんです。トランス女性も好きな服装で自分らしく生きましようと言うのは簡単ですが、そのハードルはまだまだ高く、社会の認知や理解をもっと進めないといけないと思いました。

金沢市のパートナーシップ宣誓制度導入に思うこと

松中：金沢で過ごした自分の子どもの頃を思い出すと、夢のようです。いないことにされ、笑いものにされ、そういう存在だった同性カップルが、金沢市という公の機関によって認められたわけです。制度がスタートして、すでに数組のカップルが利用していると聞きました。金沢を出て東京で暮らし、これまでずっと帰省するのが億劫で、金沢駅や小松空港に降り立ったときには、いつも重たい空気を感じていました。そんな僕が、金沢の街の空が明るく見えるくらい、こんなにも素敵な街だったんだと気持ちがポジティブに変わるくらい、嬉しいことだなと思います。

東：金沢市で制度ができると聞いたときは信じられなくて、感無量でした。登録されたカップルのみなさん、おめでとうございます。これをきっかけに気に留めてもらいたいことがあって、それは、制度はできたけれど今は利用しない人、お一人で生きている人、いろんな家族の形を作りたい人など、いろいろな選択をする人がいるということです。日本では現在、同性婚はできないですが、異性カップルの結婚だけではなく、同性カップルだけでもなく、いろんな選択をする人、子どもを持つ人・持たない人、結婚する人・しない人、いろんな人がいるということです。そして、それを考えていくこと、社会の中でいてもいいんだとみんなに思ってもらうこと。実はそれは、一人一人の人権を大切にしていることだということを、これは人権の問題なんだということを、そして、いろんな人がすでに一緒に生きている街なんだということを、ぜひ金沢市には伝えていただければ嬉しいです。

斎藤：カミングアウトしてから、個人的にはいろいろ応援してもらったり、支えてもらったりしました。でも、公に支えてもらってないよな、というのがずっとありました。なので、行政としてこういう制度を作ってくれるというのは、公の人がようやく自分たちの存在を認めてくれた、最初の金字塔かなと思っています。選択肢の多い社会が、一番豊かな社会だと思っています。たくさん人の選択肢の中で、何と何を組み合わせてどう生きていくか、



それは個人の問題ですけど、そもそも選択肢がないと、本当に生きづらいものです。いま金沢市がこういう制度を作ってくれたことは大きな一歩だと思います。あとは企業がこれを活用し、企業としてこれまで取りこぼしていたような人も自分たちの仕事に巻き込んでくれたらと思います。

松中：金沢の第1号のパートナーシップ宣誓をした方が知り合いで、そのお二人から聞いた素敵なエピソードをご紹介します。お二人は飲食店を営んでいて、いろんな食材を仕入れに行くわけです。その仕入れ先の一つに、おばちゃんが切り盛りしているお豆腐屋さんがあって、そのおばちゃんはいつも、厚揚げやら何やらをおまけでつけてくれるそうです。それでパートナーシップ宣誓を終えた週明けに、いつものように豆腐を仕入れに行ったら、「ちょっと待ってて」と言われ、今日は何をくれるんだろうと待っていると、なんと冷蔵庫の中から花束を取り出して、プレゼントしてくれたんだそうです。「あんたらのこと、自分も誇らしいわ」と言葉を添えて。パートナーシップ宣誓制度は、そのお二人のための、と、なりがちですが、実は周りの方々も幸せにし、ポジティブにしてくれるものなんだと、あらためて教えてもらったエピソードでした。

東：最後に、金沢がよりカラフルなまちになるために、身近な人や家族にも当事者がいるかもと思ってコミュニケーションを見直してくれたら嬉しいです。もし、カミングアウトを受けたら、それは信頼の証し。「話してくれてありがとう」と伝えて、信頼関係を育んでいってほしいです。そういった輪が金沢に広がってくれることを願っています。

かずえちゃん：みなさま、貴重なお話ありがとうございました。

構成／山縣真矢

(※) 釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也 2016『性的マイノリティについての意識—2015 年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ(研究代表者 広島修道大学 河口和也) 編